

Theodor Gottlieb von Hippel 研究のための一次資料の閲覧・比較および収集	
田崎 聖子	比較社会文化学専攻
期間	2006年8月28日～2006年9月25日
場所	ドイツ連邦
施設	バイエルン州立図書館、ヘルツォーク・アウグスト図書館、ケーニヒスベルク博物館

内容報告

1. 本海外調査研究の必要性と目的

2006年3月に提出した修士論文『ドイツ啓蒙期の女性観 — Theodor Gottlieb von Hippel の場合 —』において私は、テオドル・ゴットリーブ・フォン・ヒッペル(Theodor Gottlieb von Hippel, 1741-96)の著作『婚姻について(Über die Ehe)』の初版(1774)と第四版(1793)の比較、さらにその二冊と『女性の市民的改善について(Über die bürgerliche Verbesserung der Weiber)』の初版(1792)との比較を行った。そこからヒッペルの女性観のエッセンスを抽出し、ルソー(Jean-Jacques Rousseau, 1712-78)、ヒッペルの親友でもあったカント(Immanuel Kant, 1724-1804)、ウルストンクラフト(Mary Wollstonecraft, 1759-97)の三者の女性観と照らし合わせることによって、ヒッペルの女性観の思想的な位置を捉えることを試みた。このことによって、ドイツ近代家族観成立の過程、すなわち、18世紀から19世紀にかけての時期に、カント、フィヒテ(Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814)、ヘーゲル(Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831)の作品の中でその構成要素が出揃ったとする哲学的言説空間を中心とするような見方とは別の、より広範な言説空間の可能性を示唆することができた。

修士論文における成果を踏まえて、そのような言説空間をさらに具体的に把握することが私のさらなる研究の課題となった。その達成のためには、ヒッペルの上記二著作以外の著作の精読・分析は当然必要不可欠であり、同時に、彼の生きたケーニヒスベルクという町の知的背景や、プロイセンの行政機構といった社会的背景の解明もまた重要である。また、それを基礎として、同時代のフランス・イギリスにおける諸議論との連関の解明、さらには後世の諸議論の文脈の中で比較し読み解いていくことが、現時点で設定可能な最終的目標となる。学位論文においてはまず、修士論文の内容をさらに深め、『ドイツ啓蒙と女性 — Theodor

Gottlieb von Hippel を通じて —』と題して、ドイツ啓蒙期の女性観、ひいては近代家族観の成立過程の解明を目指したいと考えている。

ただし、日本において、ヒッペルという人物の知名度は残念ながら非常に低く、当然彼に関する研究書は皆無といえるのが現状である。また、ドイツ語圏・英語圏においても状況はあまり変わらず、ヒッペルに関する研究書は数えるほどしかない。とはいえ、ヒッペルは、ボーヴォワールの『第二の性』において「ドイツで最初のフェミニズム宣言」を放った人物として紹介され(ボーヴォワールは、ヒッペルと、彼の同姓同名の甥とを勘違いしている)、フェミニズムの歴史にとって、その理解が正しいかどうかは別にしても、一応は重要な人物とされている。夏目漱石も、「センチメンタル派」のドイツ代表としてヒッペルとその著作「レーベンスロイフへ」(1778年初版の、“*Lebenslaeuft nach aufsteigender Linie nebst Beylagen A, B, C. Meines Lebenslaufs*”のこと)を挙げている(「トリストラム、シヤンデー」, 漱石全集第十三巻, 岩波書店 1995)。またヒッペルは、哲学者カントの友人として、カントの評伝においては頻繁に取り上げられている(例えば Manfred Kuehn: *Kant - A Biography*, Cambridge UP, 2002.)。それにもかかわらずまだまだ謎に包まれているヒッペルという人物を発掘・再発見する手立ての一つとして、今回申請したドイツ連邦ニーダーザクセン州ヴォルフエンビュッテルのヘルツォーク・アウグスト図書館における、ヒッペルの著作の閲覧・収集は必要不可欠であり、彼の女性論を読み解くという点においては最重要である。また、行政官ヒッペルを読み解く際の手段の一つとして、18世紀プロイセンにおける行政機構の解明は必須であり、そのためにもヴォルフエンビュッテルの図書館所蔵の文書は欠かすことができない。下記(①～③)に挙げた資料は全て日本国内で入手不

可能であり、かつ、資料を当該図書館の外に借り出すことができないため、今回、ヴォルフエンビュッテル現地での研究調査希望を申請した。

ドイツ渡航前に私が設定した主な目的は、以下の三点である。

- ①ヒッペルの女性論に関する著作『婚姻について (Über die Ehe)』の第二版(1776)・第三版(1792)ならびに『女性の市民的改善について (Über die bürgerliche Verbesserung der Weiber)』のFrankfurt版(1794)の閲覧と、可能であるならばマイクロフィッシュ・コピーの作製。
- ②当該図書館所蔵の Hippel の上記二著作以外の著作の閲覧。
- ③ヒッペルの生きた 18 世紀のプロイセンにおける行政機構を把握するための一次資料 Acta Borussica の、日本国内で見つからなかった部分(特に『Acta Borussica / [2], [3], [1], Bd. 4 / Die letzten 40 Jahre: 1765 - 1806』と『Acta Borussica / [1], Bd. 16, Teil 2 / Akten vom Januar 1778 bis zum August 1786』)の閲覧。

2. 本海外調査研究の具体的内容

2006年8月28日から2006年9月25日の日程でドイツを訪れた。日本からヴォルフエンビュッテルへ行くには、バイエルン州ミュンヘン経由で行くという方法が最も経済的であり、かつドイツ国内の知見を広めたいという私自身の希望もあったので、最初の一週間はミュンヘンに滞在し、その後、ヴォルフエンビュッテルに三週間滞在する計画を立てた。ミュンヘンのバイエルン州立図書館では、前もって OPAC で調べておいたヒッペルに関する文献を閲覧した。また、ヴォルフエンビュッテル滞在中の、9月8日から9月10日までは、ノルトラインヴェストファーレン州デュイスブルクにあるケーニヒスベルク博物館を訪問した。

デュイスブルクは 1951 年以来、かつてのケーニヒスベルク (1945 年のポツダム会談以降はソ連領となり、1946 年にはカリーニングラードと改名。現在はロシア領。) 在住ドイツ人の受け入れ都市であり、ドイツにおけるケーニヒスベルク同郷人会の中心地でもある。そのデュイスブルクにあるケーニヒスベルク博物館には、東西プロイセン郷土史協会の所蔵品をはじめとして、かつてのケーニヒスベルク住人達が実際に持ち帰ってきた品々、ケーニヒスベルクの歴史をたどるパネル等が展示されている。また、博物館内に事務所を構えるケーニヒスベルク同郷人会は、1962 年から年に二度、雑誌『Königsberger Bürgerbrief』を発行している。この雑誌は、全ての記事や特集が学術的なものであるわけではないが、ケーニヒスベルクを知るた

めには極めて重要な情報源のひとつである。私はここで博物館職員の熱心かつ誠実な協力を得て、『Königsberger Bürgerbrief』のバックナンバー (ちなみに、この事務所にはほとんど全ての号のバックナンバーがあった。) のうち、目録からわかる範囲でヒッペルに関する号や、絶版になったケーニヒスベルク関連の書籍、1880 年頃のケーニヒスベルク市街地図等を購入することができた。これらは、ヒッペルという人物のみを調べるためにももちろん有効であろうが、それ以上に、ケーニヒスベルクという街の全体像をより広く知るために非常に役立つと思われる。デュイスブルクでは、予想と期待をはるかに上回る収穫が得られた。

さらにそれをはるかに上回る収穫が、続くヴォルフエンビュッテルでの三週間であった。上記の目的①～③のうち、達成できなかったのは①のうちの、『婚姻について (Über die Ehe)』第三版(1792 年)のマイクロフィッシュ・コピーの作成だけであり、これは本自体の保存状態の悪さが原因である。ただし、同書のマイクロフィッシュ・コピーを所蔵しているほかの図書館を紹介してもらえたので、将来的には入手できることになった。当初設定していた目的以外に達成できたことは、大きく二つに分けられる。第一に、ヒッペル研究の論文を多数発見できたこと。第二に、ヒッペルが生きた 18 世紀中頃から末にかけて発行されていた雑誌『Iris』を発見できたこと。

第一の点に関して、その出典は、ルクセンブルク大学の独文科の紀要『Germanistik』 (Publications du Centre Universitaire de Luxembourg / Département des Lettres Allemandes. 主に、Fascicule IX-XIII の号, 1996-1998, Luxembourg) と、ハンブルク大学の Nordost-Institut

(Institut für Kultur und Geschichte der Deutschen in Nordosteuropa) の紀要『Nordost-Archiv』 (主に 63 号, 1995, Lüneburg) である。『Germanistik』IX号からXIII号まで毎回掲載されているヒッペル関連の論文はすべて Joseph Kohnen氏によるものである。Kohnen氏は 1987 年にヒッペルの評伝、『Theodor Gottlieb von Hippel』 (Nordostdeutsches Kulturwerk, Lüneburg) を出版しており、ヒッペル研究の第一人者とも呼べる人である。『Germanistik』中の諸論文は、いずれもその後に執筆されたもので、そこではヒッペルのみならず、さらにその周辺の人物の再発掘、そして、その関係性を探り出そうとする試みがなされている。これはケーニヒスベルクにおける 18 世紀後半の、人間関係の探究であるといえる。また、『Germanistik』XII号では、1764 年

から 1768 年にかけて発行されていた『Die Königsbergischen Gelehrten und Politischen Zeitungen』の掲載記事が、内容ごとに詳細に分類され、リスト化されている。ただし、ヴォルフエンビュッテルには、『Die Königsbergischen Gelehrten und Politischen Zeitungen』の実物もマイクロフィルム版も所蔵されていなかったため、実際の記事を読むことはできなかった。『Nordost-Archiv』中の、Anke Lindeman-Stark氏とWerner Stark氏の共著論文「Beobachtung und Funde zu Königsberger Beständen des 18. Jahrhunderts」では、第二次大戦後に紛失・焼失したと思われるケーニヒスベルク図書館の蔵書の多くが実はポーランドにあるということが報告されている。その中でも、ヒッペルの蔵書と思われる「H.B.」(=Hippels Bibliothek)のイニシャルを持つ書籍の多くがワルシャワの国立図書館(Bibliotheka Narodowa Warszawa)で見つかったという。また、かつてのケーニヒスベルク図書館の蔵書のうちで紛失・焼失したと思われる他の蔵書も、ポーランド国内で見つけることができなくても、おそらくは旧ソ連圏のどこかに保管されているだろうという見通しを立てている。これは少なくとも、ヒッペルの蔵書目録が見つかっていない現時点では、画期的な一歩前進であるといえよう。

次に、第二の点の、雑誌『Iris』に関しては、ドイツ渡航前に、私の指導教授である杉田孝夫教授から、「Irisという雑誌を調べてみるとよい」というご教示を頂いたのがきっかけだった。幸運なことにヴォルフエンビュッテルに実物が所蔵されていたので、早速借り出して見た。婦人向け季刊誌(Vierteljahresschrift für Frauenzimmer)『Iris』は、一度目は1774年から1776年まで(Haude & Spener, Berlin 1774-1776。ただし1774-1775: Düsseldorf)、二度目は1803年から1813年まで(Orell, Füßli & Co., Zürich)発行され、編集者は一貫してヤコービ(Johann Georg Jacobi, 1740-1814)であった。私のヴォルフエンビュッテル滞在が三週間という短い期間であったため、一度目と二度目の『Iris』を詳細に比較するということは不可能であったが、両者が大枠においてかなり異なった性質を持っているのではないかと、現時点では予測している。例えば、最初の『Iris』には、詩や小説・書簡形式の小説、新刊紹介に加え、「政治」欄が常に設けられている。しかしこの政治欄は、1775年9月号で打ち切りとなる。その弁明としてヤコービが書いた補足から察するところ、その内容が当時の常識からすれば過激すぎたようで、「公平中立」に書こうとするヤコービに外的な圧力がかかっている、やむなく中断せ

ざるをえない状態だったようである。それから一年もたたないうちに『Iris』は休刊に追い込まれる。ヤコービは『Iris』刊行以前の1773年から、ヴィーラント(Christoph Martin Wieland, 1733-1813)と実弟(Friedrich Heinrich Jacobi, 1743-1819)ともに文学雑誌『Der teutsche Merkur』(1773-1789)を刊行していたので、『Iris』休刊に際しても、冷静かつエレガントな調子で、今後は『Der teutsche Merkur』を購読してくれるよう読者に頼んでいる。それに対して、出版元であるHaude und Spenerの鼻息は荒い。Haude und Spenerが主張するには、『Iris』は、雑誌『Allgemeine deutsche Bibliothek』(編集者Christoph Friedrich Nicolai(1733-1811), 刊行Kiel: Bohn, 1765-1796。ただし1765-1792: Berlin: Nicolai)上において幾度となく「病的」と非難中傷され、やむなく休刊するが、必ずや再開し、流行に流されることのないような、確固たる主張を展開するのだという。(『Allgemeine deutsche Bibliothek』の該当部分を私は残念ながら見つけられなかったが、これは今後の課題にしたいと思う。『Der teutsche Merkur』についても同様。)こう息巻いたものの、第二の『Iris』が出たのはそれから27年後の1803年で、中身は、詩と小説だけ(風刺詩や風刺小説というわけではなさそう)である。第一の『Iris』の読者のうちのどれぐらいが第二の『Iris』の読者であったかは、再開までに27年もたっていることだけを考えてみても、あまり多くはないのではないかと思われるが、これはまだ推測の域で確認できてはいない。とはいえ、私がそう考える原因は、『Iris』購読者リストにある。季刊の『Iris』を一年ごとに束ねた書籍版『Iris』の第一巻(1774年号)の冒頭には、『Iris』出版に際して「寄付をした人」(Collecteur und Collectrice)のリスト(住所地名のアルファベット順)が載っていて、AachenからZürichまで、総勢92名の個人(女性は29人)と、一軒の書店の名がずらりとならんでいる。これは購読予約をした人のリストでもあり、取次ぎ書店名も併記されている。その中には、CoblenzのFrau Geheimrätthin von La Roche (Marie Sophie von La Roche, 1730-1807)、KönigsbergのHerr Professor Kant、WeimarのWieland、WolfenbüttelのHerr Bibliothekar Lessing (Gotthold Ephraim Lessing, 1729-1781)といった錚々たる名前があり、かなりの見ごたえである。また、住所も、Altona、Frankfurt am Mayn、Haag、Kopenhagen、Petersburg、Prag、Riga、Wien、Zürichと、広範囲である。このようなところにも、ドイツ啓蒙期の言説空間の範囲が見えてくる。

以上が、三週間のヴォルフエンビュッテル滞在中に、目的どおり達成したこと、そして、新たに書物から知

り得たことである。収穫としてもうひとつ挙げるとすれば、他の国の研究者たちとの出会い、語らいである。ヘルツォーク・アウグスト図書館は、世界各国からの研究者が集る、すばらしい情報交換の場であった。また、ヘルツォーク・アウグスト図書館における短期研究申請を、本学の「魅力ある大学院教育」イニシアティブ・プロジェクトの海外研究調査助成金によってしたことで、私費研究員とは違う、いわば正式な客員研究員として受け入れてもらえ、他の客員研究員たちとの毎日定時のお茶会や、定期的に開かれるコロキウムにも参加でき、書物との出会いだけではなく、多くの研究者との出会いも経験できた。これら研究者たちの、研究に対する目的意識の高さ、そして、その研究のレベルの高さに直接触れることができた事は、私にとって非常に刺激的であり、今後研究を進めていく上で大きな励みになるものであった。

ヴォルフエンビュッテルから持ち帰った資料をもとに、引き続きヒッペル研究を進めると同時に、ヒッペルの周辺についての研究も進めていきたいと思っている。特に、『Iris』、『Allgemeine deutsche Bibliothek』、そして『Der deutsche Merkur』については、日本国内でも入手できそうなので、その内容を詳細に分析していきたい。また、今回収集した資料を使い、ヒッペルの詳細な評伝として、次号のお茶の水女子大学生活社会科学研究会編『生活社会科学研究』(2007年度、14号)への投稿論文としてまとめることを目指す。その後、国内外の資料・研究動向・関連研究論文にも注意を払いながら、ヒッペルとカントのテキスト比較研究を進めていきたい。

最後に、このような研究成果をあげられたことについて、「魅力ある大学院教育」イニシアティブ・プロジェクトに心より感謝いたしたい。

3. 今後の研究計画

たさき せいこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 比較社会文化学専攻

【指導教員のコメント】

魅力ある大学院教育イニシアティブ「＜対話と深化＞の次世代女性リーダーの育成」プログラムの「学生海外調査研究」事業の派遣学生として、比較社会文化学専攻1年の田崎聖子さんは、2006年8月28日から2006年9月25日までの一ヶ月間、ドイツ連邦共和国、ミュンヘンのバイエルン州立図書館、ヴォルフエンビュッテルのヘルツォーク・アウグスト図書館、デュイスブルクのケーニヒスベルク博物館で資料閲覧および文献収集の機会を与えられた。田崎さんの研究は、Theodor Gottlieb von Hippelの作品と18世紀ドイツ啓蒙およびドイツ観念論との関連を、家族観および女性観を中心にして解明しようとするものである。日本では先行研究は皆無に等しく、基礎資料も少なく、ドイツでの基礎資料の収集から研究を始めなければならず、そのための機会を今回得たことは幸運であった。分散している資料を系統的に収集し、テキストと関連資料の丹念な読解を通じて、ヒッペルの作品が位置する同時代史的な文脈を浮かび上がらせる、という作業を目指している田崎さんにとって、多くの発見があった今回の資料調査は、博士論文準備のための第一歩であるといつてよい。この研究が博士論文として纏まるまでにはさらなる資料調査と広範な文献の読み込みが必要であるが、いずれ18世紀ドイツ啓蒙研究に新しい成果をもたらすことになろう。今後の研鑽を期待する。

(生活科学部 教授 杉田 孝夫)